し，代表例を供覧し報告した。

36. 陳旧性手舟状骨々折の治験

○金元良人，渡辺英詩（渡辺整形）

手の舟状骨々折は，レ線的に診断が困難なためか，捻挫として放置され，手の機能障害を，訴えてくるものがある。私達は，陳旧4症例に，尺骨より移植骨を採取し，手根掌側より，イメージ透視下で，舟状骨に穴を明け，骨釘として挿入した。この方法は手術侵襲も少く，内固定が良く，術後4週よりギブスシャーレ，温熱療法開始し，6～8週でシャーレ除去，約3～4カ月で症状が改善された。

37. 小児上腕骨外顆骨折の検討

小沢俊行，篠原寛休，藤塚光慶
住吉徹是，船津恵一，永瀬譲史
（松戸市立）

今回我々は過去8年間に当院で治療した小児上腕骨下端骨折の中から骨端離開を伴うことの多い上腕骨外顆骨折の癒合について検討した。骨端離開を生じた間隙は2週から3週で fibrous-union が形成されるため骨性骨片の癒合を待たずに内固定の抜去は可能である。手術例33例につき内固定抜去時期とその成績を比較検討した結果4週以内では non-union 1例と delayed unign 4例を認めた。だが5週以上の内固定ではすべて良好な骨癒合を認めた。

38. 下腿骨開放性骨折に対する primary fixation 例の検討

○松岡　明，曾原道和，児玉吉伸
（成田日赤）

近年，開放性骨折に対し golden hour 内に内固定を施行する事が理想的であるとされてきている。しかし，現在の医療体制の中ではしばしば時期を逸してしまう症例に遭遇する。そこで我々は，過去2年間に成田赤十字病院整形外科を受診した15症例の下腿骨開放性骨折16例を対象として，primary immediate fixation と primary delayed fixation の治療成績を比較検討した。

39. Rigid Fixation のレ線学的研究

○北島忠昭，大井利夫，小林紘一
佐久川輝章，山本日出樹（上都賀）

Rigid Fixation に基く骨変化の推移を探る目的で，内固定にて経過良好な長管状骨々折81例につき，固定術後の骨変化をレ線学的に健側と比較検討した。抜釘時及び検診時の骨内外径，皮質骨厚度，レ線上の骨濃度を測定し，A-O プレート，Eggers プレート固定例にて，プレート側の骨皮質菲薄化，A-O プレート例にて，抜釘後3年以内は継続する骨濃度の低下等の所見を認めた。

40. 両前腕切断者のリハビリテーション（第2報）——Krukenberg 断端の場合

長尾竜郎（九州労災リハ）

両前腕切断者のリハビリテーションにおいては，一般に能動義手がまず考えられ，Krukenberg 手術は通常美観上の理由で敬遠され，盲人等にのみ行われている。しかし演者の症例においては，両側に能動義手を与え，かつ Krukenberg 手術を施行したが，術後10年を経た今日，後者を専ら用い日常生活動作，職業動作を何ら支障なく行い得ている。このようなメリットに加え，必要ならば義手装着を妨げることもないのである。

41. 当院における，膝蓋骨骨折手術症例の検討

○高田俊一，重広信三郎，清水完次朗
小林　彰（県立東金）

昭和45年8月より，53年6月までの膝蓋骨骨折手術症例32例中，23例を直接検診して，その予後を検討した。正座可能例15例（65，2％），無疼痛例22例（96.1％），無跛行例19例（82.6％）で，略々満足すべき成績と考える。

膝蓋骨骨折の手術治療に際しては，膝伸展機構全体を考慮することが必要であることを強調し，併せて，問題例3例について述べた。

42. スポーツ選手の膝の障害第1報

○鍋島和夫，布施吉弘，岡崎壮之
堂後昭彦，黒田重史（川鉄）
守屋秀繁（千大）

症例は21例で，損傷部位の内わけは，半月板損傷8，外側構成体損傷2，内側構成体損傷5，膝蓋骨，膝蓋腱損傷2，十字靱帯損傷2，その他1であった。術後の機能訓練の重要性に注目し，半月板摘出術後の機能訓練のタイムテーブルを例に出した。サイベックスマシンを用いて筋活動を分析し，受傷後の機能訓練の一助としている。